

氏名	なかの ゆうこ 中野祐子
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第65号
学位授与の日付	平成19年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	臨床実践体験としての「見立て」に関する心理臨床学的研究 ——その生成プロセスと心理臨床的機能の観点から——

論文調査委員 (主査) 教授 藤原勝紀 准教授 皆藤章 准教授 田中康裕

論文内容の要旨

本論文は、心理臨床での鍵概念である「見立て」について考究したものである。本研究は、「見立て」を臨床実践体験として捉え、心理臨床の場において刻一刻移り変わる現象をいかにとらえ理解しながら、いかに立ち会い振る舞うか、その細やかな試行錯誤の夫々および総体と考へて、この動的で多義的な視座に徹底しながら、心理臨床の営みを、生き生きとした臨床実践体験と密接に結びつけたダイナミックな営みそのもととしてとらえ、理論的・実践的に考察することを試みたものである。

第1章『研究の背景と問題意識』：「見立て」を生成プロセスと機能の観点から取り上げ検討する必要があるとの問題意識について、出発点となった臨床実践体験を提示して、手探り感・主観性・直接関与性・体験の共有性・非共有性の4点を整理し、その曖昧で不確かな心理臨床に独特の体験世界を、心理臨床家は何を手がかりに、何を支えに、何に確かな手応えやリアリティを感じて、クライアントと共に生き抜いていこうとしているのか。このことを明らかにするため、「見立て」概念を通じて臨床実践体験として辿り、実際の現象に記述に基づいて考察していく出発視点を論じた。

第2章『研究の視点と目的』：問題意識に理論的考察を行い、「見立て」という営みをどのように捉えているかという研究視点の明確化がなされる。丁寧な臨床実践体験と文献・理論的検討により、①リアリティの感覚と「見立て」という視点、②「何を見立てるか」という内容よりは、「いかに見立てるか」という見立ての動きや働きに着目する動的な視点を提示し、研究課題を焦点化している。また研究目的については、臨床実践体験の具体的な詳細な検討を通して「見立て」の生成プロセスと心理臨床的機能の観点から、現象のままにみつめ動的に捉え出すこと、「見立て」概念の理論的・実践的検討を通じて心理臨床の営みそのものを捉え描き出すことを明示した。

第3章『土居健郎の「見立て」論』：見立てに関する唯一の体系的な研究である土居の四著作について年代順に丹念な文献研究を行い、12視点を見出し検討した。この論がいかに多岐にわたるか、いかに心理臨床の本質に関わる根本テーマが含まれているかが論じられた。その上で、土居の「見立て」論の背後に存在する「診断」という判断軸に対し、心理臨床の「見立て」は、クライアントとの人間関係を通じた理解が主軸の営みであり、主観性や直接関与性に伴う曖昧さの中でいかに生き抜くか、いかにリアリティをおさえるかが、心理臨床に固有の研究課題であると考察された。

第4章『心理臨床事例研究の方法』：本研究を進める「心理臨床事例研究法」について、直接関与性を重視する観点等から、自身の臨床実践体験を素材とし、個別の関わり実感に基づいて「見立て」生成プロセスを描き出す研究手法であると提示し論じた。研究上の基本的立場として①内的体験・内的プロセスの注目、②臨床事例の選択理由、③倫理的検討事項の3点を論じ、具体的方法として「臨床実践体験」に照準を定め、事例選択理由の明示、内的体験と外的事実を提示する際の区別と意識化、内的体験の厳密な言語化などの新しい工夫を示し、以下三章の事例研究の前提を論じた。

第5章『初回面接における「見立て」生成プロセス』：場面緘黙児との初回面接を臨床実践事例体験1として、初回1回に留まるところから浮かびあがってくる「見立て」生成プロセスを詳述し考察された。そこから、「見立て」は、①一回性

において重層的になされる、②瞬間的であり同時に全体的、③見立ての背景に、見立てを生み出す場として生き生きとした体験の渦がある、④見立ては仮説であり関係プロセスで生かされ機能すると考えた。また、見立てのプロセスは同時にクライエント側にも生じ、相互の見たて合いにより面接の各瞬間が紡がれ事例の流れが生み出され、見立ての歩みと共に事例も歩み進んでいく、といった仮説視点・課題が論じられた。

第6章『心理療法面接の全過程における「見立て」生成プロセス』：臨床実践事例体験2は、離人感を主訴に来談した大学生男子事例の全面接過程に基づく「見立て」生成プロセスの詳述と考察である。セラピスト側に加えて、クライエント側の「見立て」、二人の間での「見たて合い」にも着目し、面接経過で重要な意味をもって立ち顕れた二つのイメージ現象に関する「見立て」生成プロセスに、全面接過程が克明に描き出されえたことから、「見立て」生成プロセスと事例の流れ・展開とが、密接な関係にあり同時に連動して進展するという仮説（第5章で展開）を例証した。そこから、その心理臨床的機能について論じ、①クライエント側においては、自らが手応えの感覚をもって個別性をつかみとっていくプロセスが、面接の流れ・展開を生み出す推進力になること、②セラピスト側においては、クライエントの主體的な動きを尊重し、潜在的可能性に気づき拾い活かす働きや二人の距離感を調整し安心感をもたらす働きを担うと考察された。さらに「見立て」生成プロセスを共有する営みは、共同して可能性の芽が育つ土壌づくりを行うことに相当し、二人の手応え感を頼りに選ばれ続け生成され続ける「見立て」こそが、面接の流れを生み出すと考察した。

第7章『バウム描画における「見立て」生成プロセス』：臨床実践事例体験3は前章事例の内、バウム描画（全6回）を用いた際の「見立て」生成プロセスの記述と考察である。バウム画が描かれる「表側」の瞬間と、「裏側」に流れる「見立て」生成プロセスが絡まり合いながら積み重ねられた描画経過が記述された。それは、①一回限りのものとして現出し、相互の間で独自に創りだされるバウム描画の営み自体の働きを読み取るものとして、また、②一回の描画と向き合う面接の裏側でなされるセラピストの見立てと、課題と向き合うクライエントの一回性の必死の取り組み双方の手応え感が面接と描画を支えたと考察された。その上で、「見立て」とは、「図」そのものとの対話を通して、「地」の背景や働きを感じ取り、連想を広げ多義的にイメージを拡充していく重層的営みと論じた。この営みがもつ心理臨床的機能の一つが、「見立て」が相互に共有されることで幅広いイメージが許容される面接空間がもたらされること、イメージの多義性・重層性が込められることで面接の場がより可能性に開かれた自由で密度の高い場になると考察した。

第8章『研究を通しての総合的考察』：最終章として、前章までを振り返り、心理臨床学的研究としての考察がなされた。①研究姿勢に関して、臨床実践に向き合う中から研究視点を見出だし、臨床実践を通じて研究視点を洗練する延長線上に臨床実践と研究が相互に呼応し合う研究の取り組みと考察された。②研究方法に関して、土居以来初めて事例研究法により体系的に心理臨床の「見立て」を論じ、心理臨床の基礎現象を捉え検討した研究と位置づけ、臨床実践に照準を定める手法から、動的な「見立て」生成プロセスの描写することで心理臨床の営みの本質記述可能性に一定の成果を得たと考察した。③本研究方法を通じて見えてきたこととして、三事例研究から各位相において「個の宇宙」とも言える、「一」に動的プロセスが内在されていることが例証され、「一回」そのものと向き合う「見立て」視点が見出だされた。④研究の還元の可能性については、心理臨床家が生身の限界性を抱えた上で、いま・ここという限定性において生き抜く営みこそが「見立て」の心理臨床的意義と考察された。最後に、研究の意義と展望を論じ、①本研究の取り組みが、心理臨床家の主観的への見方の洗練化、②曖昧な臨床実践体験への一定の確かさと検証可能性から、関係性を生き抜く支えとしての利用可能性を論じ、心理臨床家の教育研修への貢献可能性が期待されると考察した。最後に本研究の限界を吟味し、研究者の内的体験を素材にするがゆえに研究者の内的体験の限界をもつ可能性を論じ、理論的知識を生きた「見立て」の中でどう関連づけ位置づけるかが今後の重要研究課題であると考察し締め括った。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心理臨床の鍵概念である「見立て」に関する迫力に満ちた研究成果である。精神医学における土居の「見立て」論以来、初めて心理臨床の観点から体系的に検討したこと、しかも心理臨床の営みに固有の臨床実践体験への徹底した視点と方法によって考究した点において、本論文は独創性ある出色の課程博士論文といえる。本論文には、複雑で困難な生身の人間に関わる臨床実践体験の入念な記述と緻密な考察がなされており、心理臨床学研究に久しく待望された研究として、将

来の可能性が期待される。また心理臨床学研究の専門性の輪郭を提示するに相応しい、典型的な課程博士論文モデルともいふべき、臨床実践体験に根拠した論文として高く評価された。

論文は全8章から構成され、「見立て」を臨床実践体験として捉える観点から、心理臨床の場という刻々に移り変わる現象を、いかに捉え理解しながら、いかに立ち会い振る舞うか、その細やかな試行錯誤の夫々及び総体と考えて、動的で多義的な視座に徹底しつつ、心理臨床の営みを、生き生きとした力動的な営みそのものと捉え理論的・実践的に考究している。第1章『研究の背景と問題意識』では、研究の出発点となった臨床実践体験を提示し、「見立て」を生成プロセスと機能の観点から検討する必要性を論じ、研究視点を明示する。第2章『研究の視点と目的』は、問題意識を臨床実践体験に照らしながら文献的・理論的考察を行い、学術研究視点として明確化するとともに、研究目的を明示している。第3章『土居健郎の「見立て」論』は、先行する唯一の体系的研究に詳細な検討を加え、「診断」ではなく、独自の心理臨床研究課題としての「見立て」概念を検討している。第4章『心理臨床事例研究の方法』は、本研究で照準にした基本的研究手法に関する方法論的考察である。その上で具体的な研究上の事例提示のあり方、基本的姿勢及び研究倫理上の配慮等が丹念に示される。第5章『初回面接における「見立て」生成プロセス』は、場面緘黙児との初回面接に限定した臨床事例体験の詳細な記述に基づき、一回性に留まる研究視点の有効性を考察している。そして見立ての背後にある相互の見たて合いの重要性を論じ、見立てと面接過程の密接な絡まりで事例が展開していくとの仮説課題を提示する。第6章『心理療法面接における「見立て」生成プロセス』は、離人感を主訴に来談した大学生との長期の面接経過全体の流れを臨床実践事例体験として提示し、入念な考察を行い、「見立て」機能の生きた有り様に関する考察を深め、前章での仮説課題を例証している。第7章『バウム描画における「見立て」生成プロセス』は、前章事例のバウム描画（全6回）のみに素材を焦点化して、心理臨床査定と面接関係とを不可分とする視点からの考察を展開している。最終の第8章『研究を通しての総合的考察』では、前章までを振り返り、研究全体を通覧し、①研究姿勢、②研究方法、③研究を通して見えてきたこととして簡潔かつ洗練された総合考察となっている。締め括りに本研究の意義と展望として、①心理臨床家の主観性への見方を洗練する意義、②曖昧な臨床実践体験への一定の確かさと検証可能性を得たことから、臨床実践で関係性を生き抜く支えとしての利用可能性を論じ、心理臨床家の教育研修への貢献可能性を展望した上で、研究者の内的体験を素材とするがゆえの限界等も吟味考察している。

口頭試問では、どんな書き手によるのかと関心をそそる論文との評もあり、著者が限界吟味に示した点を含めて今後に深めるべき理論的・実践的課題は残されるが、心理臨床学研究として高度に洗練された完成度の高い課程博士論文として評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年7月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。